

栄養不足が招いた？ アレルギーと体調不良。

今回の主人公は、幼少の頃からアレルギー性の疾患や体調不良を抱えたまま大人になった、30代後半の女性です。目や皮膚の痒み、喉や歯ぐきなどにさまざまな症状が現われ、病院に通いますが根治しないまま成長し、やがて出産。その子どもにも湿疹がみられます。アレルギー体質から、女性はどうやって抜けだしていったのでしょうか？

東京で生まれ育ったSさんは、明るい語り口調が印象的な女性です。長年、アレルギー性の病気に苦しんだとは思えないほど、健康的な笑顔が輝いていました。

ところが30年余り、彼女は人

両親は健康で、わずかに父親が花粉症の薬を飲んでいただけ。二人の姉もアレルギー性の病気はなく、どういうわけかSさんだけが一人、病弱でした。

小学校時代、記憶にあるのは顔や手足の関節部分のアトピーの症状でした。4年生の頃、プールで泳いだ後、塩素の影響で皮膚が痒くなり、医師からアトピー性皮膚炎と診断され、ステロイドを処方されます。目にモノもらいができやすく、ワクチンを打って倒れたり、学校を早退することもありました。

ほかに歯ぐきに膿がたま

る、猫アレルギーで猫に近づけない。お風呂の石鹸で体を洗うと湿疹が出るなど、さまざまな症状に悩まされます。

はつきりした原因はわからないようですが、一つ考えられるのは食生活です。聞けば、幼少の頃から極端な偏食で「母の手料理をあまり口にしない」子どもで、麺類や加工食品、チョコやスナック菓子、甘いジュース、コーンスープなどのインスタント食品を好んで食べていたそうです。果物は好きですが、野菜はほとんど摂らない。近所におばあちゃんがいて、そこでも「好きなモノばかり食べていた」と振り返っています。

そんな食事が体に良いはずはありません。中学に入っても変わらず、アトピーの症状がひどくなり「顔が痒くて、掻いたあとが残る」ようになったり、高校の頃には「洗剤の柔軟剤が合わなかったのか、服や肌着からも痒みが出るほど」だったそうです。そのほか、腎盂腎炎も何度か経験しています。学校では「いつもお腹が空いて、皮膚の湿

疹や痒みでイライラしていた」と語っています。

ただ、薬で一時的に良くなることから、あまり重症化しなかったのはまだ不幸中の幸いでした。とはいえ、人生の多感な時期に健康状態に不安を覚え、落ち込むことはなかったのかといえは嘘になるでしょう。

社会人になっても、自分の状態と付き合いながら一進一退のまま日々を過ごします。その後、28歳で第一子を出産。その子は生まれてすぐアトピーの症状が出て、医師からステロイドを処方されます。

Sさんと子どもはこの後どうなっていくのか、続きは次号でお伝えします。



あきやま しんいちろう
秋山 真一郎

医師・医学博士、カナダマギル大学臨床腫瘍学客員教授。NPO法人がんコントロール協会理事。がん免疫治療と植物栄養素を中心とした免疫栄養療法など、副作用のない多角的療法で成果を上げている。